

1. 研究の背景

本共同研究班は、学園都市近隣大学教員で中国を研究対象とする研究者間の研究交流を目的に組織され、今期で第6期の共同研究であった。これまで、近隣大学の大学院生にもオープンにしながら、それぞれの専門分野から報告を行い、討論の場を設けてきた。

2014年に第5期共同研究（「未来に向けた日中交流と日中相互関係」代表：兵庫県立大学・陳來幸教授）が始まったが、日中間の政治関係は改善しつつあったものの、必ずしも好ましい方向には向いていない。本共同研究班では、改めて、両国間の文化交渉、経済交流、人的交流に関し、その歴史的意義と実態を確認、共有し、日中の相互認識の強化に努めなければならないとの認識の下にスタートした。

2. 研究実績

2018年8月に「グローバル時代の新しい教養—未来に向けた日中交流と日中相互関係」共同研究班が発足し、翌2019年4月より本格的に共同研究をスタートした。ところが2020年に入り、新型コロナウイルス感染症の拡大により、研究班としても対面での研究会活動を自粛せざるを得なくなった。予定していた、幾多の議論を残していたため、同年8月に、助成期間の一年間延長を申請、受理され、2021年8月まで研究活動を行った。これまで3年間に、研究会を全11回（下表参照）開催した。UNITYセミナー室での対面研究会を6回、Zoomによるオンライン研究会を5回開催し、それぞれの専門分野から「未来に向けた日中交流と日中相互関係」について論じ、議論してきた（特別研究会、「中国の環境問題」および「ジェンダーから見た残留孤児問題」を含む）。

表 研究会活動の推移

	日程	報告者	タイトル
第1回 (UNITYにて)	2019/4/17	流通科学大学 辻 美代	日中アパレル企業の比較 — WORLD vs ICICLE
第2回 (UNITYにて)	2019/5/22	京都大学 小島 泰雄	郷村振興の文脈
第3回 (UNITYにて)	2019/6/26	神戸市外国語大学 紺野 達也	日本と東アジアの漢詩文の交流 —中国文明の伝播という視点から
第4回 (UNITYにて)	2019/7/24	兵庫県立大学 陳 來幸	華僑を通じた日本における中国料理の定着
第5回 (UNITYにて)	2019/10/23	神戸市外国語大学 林 範彦	雲南省文山のミャオ語調査から —民族・移民・加速主義・中華未来主義を見据えて—
第6回 (UNITYにて) 特別研究会	2019/12/16	①夏軍（北京京文法律事務所） ②方応君（蘇州工業園区綠色江南公衆環境センター） ③呂妍（北京天下溪	「中国の環境問題」について

		教育相談センター) ④劉科(湖南省創意環境科技傳播センター) ⑤楊緯和(北京書和路上文化メディア株式会社) ⑥李力(北京市環友科學技術研究中心)	
第7回 (Zoom) 特別研究会	2021/3/10	奈良女子大学大学院 上尾 さと子	ジェンダーから見た中国残留孤児 —女性比率に着目して—
第8回 (Zoom)	2021/6/9	神戸市外国語大学 秦 兆雄	弓道場から日中交流を考える
第9回 (Zoom)	2021/7/16	神戸市外国語大学 津守 陽	強がる言葉と傷つく身体 —沈従文の性暴力形象を読む
第10回 (Zoom)	2021/7/28	兵庫県立大学 萩原 弘子	中国の競争力について
第11回 (Zoom)	2021/8/16	神戸市外国語大学 櫻井 次郎	政治体制と環境問題について考える

3. 今後の展望

研究会では、異なる分野の中国研究者が相互に啓発し合いながら、グローバル時代における日中交流と日中相互関係の歴史的意義と現状を確認し、若い世代(大学院生等)への意見交流の場を提供してきた意義は大きいと考えている。とはいえ、新型コロナウイルス感染症の拡大により研究活動が一時停止し、Zoomによるオンライン研究会を再開したものの、十分な議論が尽くされたとは言い難い。

2021年、第7期研究班(「多文化共生社会の構築とグローバル新時代における日中関係に向けた教養」代表;神戸市外国語大学・林範彦教授)が発足し、第6期で議論し尽くせなかった点を、新たな視点から共同研究を継続することが可能となった。学園都市各大学における日中の中国研究者および大学院生がそれぞれの専門性を生かしながら共同研究の場集い、様々な問題を議論していくことは、日中相互理解を深める重要な機会である。今後、さらに様々な分野における日中関係を議論し、相互理解を深めて行きたい。以下、第7期共同研究の趣旨を抜粋する。

ここで改めて、両国間の文化交渉、経済交流、人的交流に関し、その歴史的意義と実態を確認、共有することは極めて重要である。本研究班はこれらの知見を教育に還元することで、地域社会並びに若い世代に対する日中の相互認識の強化と醸成に努めなければならないと考えている。さらには、日中関係の新たな枠組み構築が必要とされる現在、若い研究者層が先細りとならないよう、学園都市に所在する中国研究を志す大学院生に対して、日中の相互理解を真摯に考える場を提供することも重要だと認識している。